『ぼくはおじいちゃんと戦争した』を読んで

私はこの本を読んで、「ぼく」とにているところと
にていないところがあると思いました。
にているところは、「戦争だ!」と自分で言って、
自ら始めているにもかかわらず、
(おじいちゃんだから) てかげんしてしまうところです。
にていないところは、てかげんするとはいえ、
戦争をするという勇気をもっているところです。

あやか ぃ(小4)

『ぼくはおじいちゃんと戦争した』を読んで

今まで戦争とはなんだろうなんて一度も考えていなかったけれど、

この本を読んで、戦争とは何かの考えがわかった気がした。

でも、ぼくとおじいちゃんの戦争を見て、

こんな戦争もあるんだなと思った。

わたしもだれかと戦争したいなと思いました。

ゆみ(小5)

『ぼくはおじいちゃんと戦争した』を読んで

最初に題名だけを見たら、血祭りを想像してしまったけど、
読んでみたら死ぬようなことがなくて安心した。
わたしも自分の居場所をとられたら不満に思うけど、戦争という発想は
でてこないから、最初にスティーブが「戦争」と言ったのがしょうげきだった。
この本を読んで、戦争はとてもこわいものだと知れた。
わたしは世界が平和になってほしいと思った。
そのために自分にできることを見つけたい。

はるか(小5)

『ぼくはおじいちゃんと戦争した』を読んで

“ぼく”は、自分の部屋をおじいちゃんにとられたことで、
戦争を始めました。本物の戦争ではなく、「いたずら合戦」です。
おじいちゃんのいたずらは手がこんでいて、おもしろいので、
読んでいると、顔がニンマリしてきてしまいます。
戦争をしたことで、二人は大切なことを知ることができます。
ぜひ読んだら、あとがきにも目を通してください。
おどろく情報があります。

こころ(小5)

『ぼくはおじいちゃんと戦争した』を読んで

ぼくは、おじいちゃんは、なかなかおもしろい人だなと
思いました。楽しく戦争にのってきて、
それぞれ、ちょっとしたトラブルをおこして、
なかがいいんだなと思いました。

あつき(小4)

『ぼくはおじいちゃんと戦争した』を読んで

おじいちゃんに部屋をとられた「ぼく」に同情しました。

しかし戦争はやはりいけないことだと思います。

戦争は相手が悪いことをすると自分自身もそれ以上に悪いことをし、

それがくりかえされてとてもひさんな事になるので

おたがいに思いやって解決するべきだと思いました。

こうのすけ(小5)

『ぼくはおじいちゃんと戦争した』を読んで

大好きなおじいちゃんは部屋どろぼう？！

ピーターとおじいちゃんの小さな戦争がハラハラする！！

おじいちゃんの部屋にしのびこむ！しずかに…。

戦争は話し合いをしないから起きる。

言葉を伝え合う大切さを感じた。

ひまり（小６）

『青の読み手』を読んで

この話は、下町ネズミの少年ノアが姉のようにしたっている
行方不明の少女ロゼを、サロモンの書と
しゃべるネズミパルメザンの力を借りてさがしだす話です。
私は、ノアが悪い「男しゃく」に命令され、
サロモンの書をぬすみだすシーンが一番ドキドキしました。

ふみか　ぃ(小5)

『青の読み手』を読んで

私は、この本のもくじのページを開くと書いてある
「血の色をした本」や「生きている本」などが
「この本おもしろそう。」「はやく読もう。」という気持ちを
引き出してくれるので、いいと思いました。

あやか　ぃ(小4)

『青の読み手』　を読んで

このお話は、こわかったです。

赤い本、あくま、男しゃくがとくにこわかったです。

でも、続きは読みたいと思える本でした。

わたしは、王子の正体がでっかいカエルだと知って気持ち悪くなりました。

わたしは、自分に愛情をそそいで育ててくれた人を

王子はかんたんに毒でころせるなんて最低だと思いました。

ロゼ姉さんに会えてよかったと思いました。

はるか(小5)

『青の読み手』　を読んで

このお話は王室から下町、修道院といった幅広い場所が舞台となっていたり、
過去と現在を行ったりきたりしていて、少し理解するのに時間がかかりました。
でも、理解すると壮大なストーリーとたくさんの伏線があり、とても面白かったです。
特に、「下町ネズミ」として国の最下層にいたノアが
ある一つの依頼から王宮で繰り広げられる陰謀に巻き込まれていくのは
びっくりしたし、少し怖いところもあったけれどワクワクしました。

ななえ(小6)

『青の読み手』を読んで

主人公が姉を必死に助けようとするのですが、
僕にも兄弟がいるので、自分ならどうするかということを
考えながら読み進めました。
僕もノアのような行動力が欲しいと思いました。

こうのすけ(小5)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

けんか別れをした碧衣と希子だったけど、

手紙でまた仲直りできてよかったです。

桜川さんの物語もおもしろかったです。

最後に、桜川さんだけでなく、クラスのみんなが碧衣と仲良くなったのは

桜川さんの物語のおかげだと思います。

さくら(小4)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

この本はとちゅうとちゅうに入っている妖精リーナの物語もおもしろく、
一人一人を大切にしているお話だと思いました。
光矢がかく絵もすごく美しくて、きれいです。
夏休みの宿題を、3人で「妖精リーナの冒険」を本にして、
学校の図書室におこうと決めるのがエピローグですが、
この後どうなったかがとても気になります。

ふみか　ぃ(小5)

『わたしたちの物語のつづき』 を読んで

ずっと一人だったあおいが、一つの物語で

友達をつくるところがおもしろかったです。

私も結奈と同じで、物語をときどき書いているけれど、

途中でやめてしまって、やる気をなくすところが似ているなと思いました。

でも、私も、あおいのような友達がいたので、

物語のつづきを考えることができました。

この本のシリーズがあったらいいなと思います（笑）

ゆみ(小5)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

碧衣が拾ったノートの作者が結奈と知っておどろきました。
碧衣は希子とはなれてしまって、友達が作れなかったけど、
どんどん友達がふえていってよかったと思いました。
「妖精リーナの冒険」の続きを結奈ががんばって書いて、
それを光矢と三人で協力してすごいと思いました。

さき　ゃ(小6)

『わたしたちの物語のつづき』を読んで

わたしは本を読むのは好きだけど、
物語とかを書くのは苦手なので、結奈はすごいと思いました。
「妖精リーナの冒険」が、わたしもおもしろいと思いました。
わたしもお話を書いたことがあったけれど、一人じゃ満足なものが
作れなかったので、本もいろんな人と協力して作っていると
書いてあったところを読んで、うなずいてしまいました。

はるか(小5)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

このお話には、物語を作っている小学生がでてきます。

本を読むのが好きで、たまにお話を作っているわたしにとって、

「同じだ」と思うところもありました。主人公のあおいが、

最後まで作者のサポートをして、すてきな物語が完成しました。

あおいは、物語ができていくにつれて、勇気を出して一歩ふみ出せました。

わたしの物語をだれかが読んでくれることがあったら、

読んでくれた人が元気になれるようなお話を作りたいです。

こころ(小5)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

わたしは、結奈が書いた「妖精リーナの冒険」という本の題名が
いい題名だと思いました。
理由は、「冒険」という言葉が入っているからです。
冒険は、ドキドキしたりワクワクしたりするので、
「妖精リーナの冒険」も同じようにドキドキ、ワクワクしました。

ひなた(小4)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

わたしは結奈がすごいなと思いました。そのわけは、

一回書くのをあきらめた物語を、あおいが勇気づけて完成させたからです。

この物語で、いいなと思ったことは、だれかが一人だけで書くのではなくて、

みんなで協力していたところです。

心に残ったので、また読みたいです。

あやか　っ(小5)

『わたしたちの物語のつづき』 を読んで

このお話は、「妖精リーナの冒険」というお話を
「わたしたちの物語のつづき」というお話の中で作っていく内容です。
よくお話の中にお話がある本はよくありますが、
その物語を作っていくというお話を私は初めて読みました。
「わたしたちの物語のつづき」の途中途中で、「妖精リーナの冒険」が
展開されていくので、早く続きが読みたくなるという
主人公の女の子にとても共感しました。

ななえ(小6)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

主人公のあおいが小さなノートを拾い、

その物語の続きを読みたくて、

いっしょうけんめい作者をさがしていたのが、すごいと思いました。

そして作者の人とたくさんしゃべり、物語のつづきが

無事読めて、いいお話だなぁって思いました。

ゆきな(小5)

『わたしたちの物語のつづき』　を読んで

本をつくるためには、大変なことがたくさんある。

私もお話を書いてみたことがあるけれど、

と中でおもしろいか分からなくなって、止まってしまう。

でも、この本を読んで、私も新しい本を書きたいと思った。

本の中の言葉一つ一つをしっかり考えたい。

ひまり(小6)

『わたしの気になるあの子』を読んで

これは学校のこまかなルールにぎもんをもった子どもたちが、

全力で学校にこうぎしようとするお話です。

私は、「詩音」という少女がかみの毛をそって丸がりにし、学校に来て、

冷やかす人々の視線を感じながら一人ぼっちになっているとき、

主人公の女の子が助けてあげるシーンが気に入っています。

私もそんなことができるといいです。

ふみか　ぃ(小5)

『わたしの気になるあの子』を読んで

私はこの本が大好きになりました。

理由は、女の子だから女の子らしくする、男の子だから

男の子らしくするきまりなんてないはずなのに、

勝手にそんなことが決められている世界は楽しくないし、

勝手に差別するのはよくないと思っていて、

でもそういう校則などをけすために、自分をつらぬくお姉さん、

それをおうえんするやさしい妹、それをまたおうえんする友達たち。

私もそんな妹や友達がほしいなと思いました。

あやか　ぃ(小4)

『わたしの気になるあの子』　を読んで

私は、詩音みたいにボウズにはなれないと思いました。

姉のためにささえになろうとするところに心をうたれました。

こずえ(小4)

『わたしの気になるあの子』　を読んで

わたしもぼうずはなんとなくかわいいと思うけれど、

るみなや詩音は、ふつうにぼうずにできて

勇気があるなと思いました。

ももか(小４)

『わたしの気になるあの子』　を読んで

入学式の日に詩音が坊主になっていておどろきました。

でも、理由が分かって、詩音はやさしい子なんだと思いました。

お姉ちゃんの高校は、校則がきびしくて、その中でも校則を変えようと思って

坊主にしたのは、すごいと思いました。わたしだったら、できなかったと思います。

それを見た詩音も元気づけようと思って坊主にしたのは、

なかなかの勇気がいると思いました。

“社会のきそく”というものを、改めて考える話で、心にひびきました。

さき　ゃ(小6)

『わたしの気になるあの子』を読んで

私が一番心に残ったのは、

詩音に本気だって事を信じてもらうために

瑠美奈も丸刈りにしてきたところです。

私だったら、いくら信じてほしくても、

自分まで丸刈りにすることは無理だと思います。

なので、瑠美奈みたいな子はすごいと思いました。

なな(小6)

『わたしの気になるあの子』　を読んで

詩音がお姉ちゃんの力になるために、ぼうずになったところが
すごくやさしくて感動しました。最初は、大じょうぶかなと思ったけれど、
だんだん詩音の仲間がふえて、よかったと思いました。
わたしは、詩音を助けたり、雨の日にかさに入れてあげたり、
ぼうず頭になって協力したりしてる瑠美奈が、やさしいと思いました。
まわりとちがうことをするには、勇気がいることを知りました。

はるか(小5)

『わたしの気になるあの子』を読んで

この本を読んで心に残った場面は、瑠美奈が坊主にするところです。

詩音は高校生のお姉ちゃんのために坊主になってすごいなと思ったけど、

瑠美奈は坊主頭になって男子にからかわれている詩音のために、

思いきって坊主にしたのがすごく心に残りました。

なぜかと言うと、友達のために坊主になっているからです。

詩音は、うれしかったと思います。

わたしだったら勇気を持って坊主にできないので、すごいなと思いました。

わたしも瑠美奈のように人の役に立ちたいです。

せん(小4)

『わたしの気になるあの子』を読んで

初めて詩音が坊主になったのを見た男子たちが、

からかったり、いじめたりしていたのを

瑠美奈が「だめだよ」と注意したのが、かっこよかったです。

少しの間、瑠美奈と詩音はもめてしまったけれど、

最後は大切な友達として仲良くなれたのでよかったです。

あやか　っ(小5)

『私の気になるあの子』 を読んで

私は、この本の表紙を見た時、丸刈りの男の子と女の子が
描かれていたし、この題名から恋愛系のお話なのかな？と思いました。
貸出カウンターにあったので、他の本を借りるときに「これも一緒に
お願いします。」と借りました。読み始めると、思っていた内容とは全く違い…
私が丸刈りの男の子だと思っていた子は、お姉ちゃんをきっかけに
ある行動を起こし、そしてその子に興味を持った子から
「ジェンダー平等」の輪が広がっていきます。
この本は、「男だから何？女だから何？」ということを
とても考えさせられました。 ななえ(小6)

『わたしの気になるあの子』 を読んで

詩音のお姉ちゃんが校そくを変えようとして、

思いきって丸ぼうずになることは、わたしにはできないので、

勇気がある人でいいなって思いました。

さべつはなくす、自分とちがっても

ばかにしない、からかわないことの大切さが分かりました。

すみれ(小4)

『わたしの気になるあの子』　を読んで

急に女子クラスメイトが坊主頭で学校に来たら？

おかしい。ヘン。女子なのに。

知らないうちに私たちは差別を受けたりしているのではないか。

男だから女だから。姉だから妹だから。

そんな言葉、よく耳にする。

私はこの本を読んで、全力で楽しいことをして、

まちがっていることには立ち向かって、平等な世界にしたいと思った！！

ひまり(小6)

『夢をかなえる未来ノート』 を読んで

わたしはあんなに野球のことしか考えてない子が

急に勉強するようになってびっくりしました。

やればできる子だなと思いました。

わたしは、やり始めてもすぐにやめてしまうけど、

この本を読んで、もっと努力できるようになろうと思いました。

わたしもこれからは、もっと本を読んでがんばりたいです。

はるか(小5)

『夢をかなえる未来ノート』を読んで

私は、この本を読んで

人をうらやましく思ったり、ずるいと思うのではなく、

計画を立てて実行していくことが大切だと思いました。

主人公は未来のために努力していたので、

見習いたいと思いました。

みりな(小5)

『夢をかなえる未来ノート』 を読んで

物語で夢をかなえるための手順が書いてあって、
とても読みやすかったです。私は、とてもはると
似ているところがおおかったので、共感できました。
現実味があり、自分で実せんしたくなります。

こと(小6)

『サイコーの通知表』　を読んで

わたしは通知表をもらうのはドキドキするけど、

4年3組のみんなが作った通知表は、楽しんで読めそうです。

先生に通知表を作るのは、ぎゃくの立場でおもしろいと思いました。

先生に通知表を作ったのは、それだけ

いい先生だったからだと思います。

さくら(小4)

『サイコーの通知表』を読んで

私も通知表はきらいだけど、

先生の通知表を作るというところが、

とてもおもしろかったです。

私もたん任の先生に通知表を作ってみたいです。

ゆみ(小5)

『サイコーの通知表』　を読んで

後半、どんどん面白くなっていって、いいお話だと思った。

でも、私には先生の通知表は作れないな。

先生を観察しなきゃいけないから、

そうすると授業が全然頭に入ってこないから（笑）

ともか(小5)

『サイコーの通知表』を読んで

先生に通知表をつけるなんて、すごいと思いました。

先生が泣いたなんて、

すごすぎる通知表だったんだと思います。

ももか(小4)

『サイコーの通知表』　を読んで

わたしも通知表をもらうのがいやだったことがあるので、

妹や弟の気持ちが分かります。

でも、ときや大河や朝陽がしたような渡し方だったら、

わたしも通知表は楽しみになったかもしれないなと思いました。

通知表は、つけた人がどう思っているのかを

ちゃんと伝えないといけないということが分かりました。

はるか(小5)

『サイコーの通知表』 を読んで

わたしは、朝陽が先生の通知表をつけようと思ったのが
すごいと思いました。
理由は、通知表は先生がつける物だと思ったからです。
そして、最後はりっぱな通知表ができたのがすごいです。

ひなた(小4)

『サイコーの通知表』 を読んで

私がこの本を読んですごいなと感じたことは、「ぼく」が

「先生に通知表を作ろう」と言ったことです。

4年生の最後にクラス全員で通知表を作って、ハシケン先生にあげたら、

先生は泣くくらい感動したんだなと思いました。

おもしろかったので、どんどん読みたくなって、早く読めました。

あやか っ(小5)

『サイコーの通知表』 を読んで

先生の通知表を作ってみようと思いついた

4年3組のみんながすごいです。

自分とだれかをくらべたら、わたしはだめって思ってしまうけど、

がんばれると本を読んで気づきました。

みんなで協力したことで先生と分かり合えてよかったです。

すみれ(小4)

『サイコーの通知表』 を読んで

みんながきらいな通知表を、いつも評価が「できる」の
あさひが「先生に通知表をつけるのはどう？」といって、
わたしはすごくびっくりしました。
わたしも通知表はにがてだけど、
こんな発想は思いつかないのですごいと思いました。

ゆきな(小5)

『サイコーの通知表』 を読んで

通知表って「よくできる」・「できる」・「もうすこし」で
分けられているけれど、どうしたらよくなるのかって分かりにくい。
学校はどうしても比べてしまうことがあって、
なやむことが多いけれど、この本の
「学校は比べるところじゃない」ってところが心にひびいた。
通知表だけじゃなく、人と比べなくてもいいと私は思う。

ひまり(小6)

『ゴリランとわたし』を読んで

ゴリラが女の子を育てることがびっくりしました。

9才の女の子（ヨンナ）が車の運転ができて、すごいと思いました。

最後、二人でいられてよかったと思います。

ももか(小4)

『ゴリランとわたし』を読んで

ヨモギギク園のヤードは自分勝手で意地悪だと思いました。

でも、ヨモギギク園の子どもたちは働いてえらいなぁ～と思いました。

おんぼろの車から、大きいゴリラが出てきたところは、読んでおどろきました。

絵を見たら、身長差がありすぎておもしろかったです。

最初は悪いゴリラかと思っていたけど、どんどん

ヨンナとの仲も深まり合っていって、すてきなお話でした。

ハラハラしたり、ホッとしたりして、とてもいいお話でした。

さき　ゃ(小6)

『ゴリランとわたし』 を読んで

最初に表紙を見た時は、意味がわからなかったけど、

読んだら意味がわかっておもしろかったです。

ゴリランはがらくたを商品として売っていて、わたしが来た時に

もっと商品を買ってもらえる方法を思いついて、

その方法を読んで、わたしはちょっといやな気分になりました。

でも最後ゴリランはとてもやさしいなと思いました。

はるか(小5)

『ゴリランとわたし』　を読んで

私はこの本を読み、作者は「どんなに悪いことがあっても
いつかはよいことが起きるんだよ」ということを
伝えたいのではないかと思った。
特にドキドキした場面は、ゴリランとヨンナがはなれてしまうところです。
自分がゴリランだったら、ヨンナだったら、と考えてしまうからです。

ひまり(小6)

『サステナブル・ビーチ』　を読んで

私は、海ゴミを再利用して作品を作ることが、

素敵だと思いました。

この本を読んで、海を汚さないことが大切だと分かりました。

さくら(小4)

『サステナブル・ビーチ』　を読んで

この本には私の知らないことがあっても、

物語のとちゅうで、登場人物がぼくに説明していたので

分かりやすかったです。

登場人物の個性がたっぷりで、おもしろかったです。

あやか　ぃ(小4)

『サステナブル・ビーチ』を読んで

海の環境のニュースはよく見るけど、

山→川→海　とつながっている事はあまり話にもでてこないと思いました。

七海は一人でゴミ拾いをするなど行動力がすごいと思い、

私も見習いたいと思いました。

こずえ（小4）

『サステナブル・ビーチ』を読んで

最近学校で習ったＳＤＧｓにつながる本です。

そうと分かった時は、読んでみたくなりました。

この本を読めば、みんなゴミをすぐポイ捨てしなくなると思います。

そうすれば、光につつまれているみたいになって、

もっともっと幸せが広がると思います。

ともか(小５)

『サステナブル・ビーチ』を読んで

すごくスラスラと読みやすい本でした。

みんなで川のプラスチックを拾って

川をきれいにするところが、心に残りました。

かのん(小6)

『サステナブル・ビーチ』を読んで

地球かんきょうのこと、れん愛関係的なこと、

おもしろいことだらけでした。

とくに七海が海のことを知っていって

最後は、学校代表の自由研究になってすごいと思いました。

ももか(小4)

『サステナブル・ビーチ』 を読んで

私は、「プラスティックは数千年にもわたって残りつづけ、
自然に分解されて土にかえることはない」と知り、おどろきました。
海を、地球を守るために何をすればいいのか、考えさせられました。

かほ(小5)

『サステナブル・ビーチ』 を読んで

わたしはこの本を読んで、今、海のかんきょうが
わるくなっていることを知りました。いつも便利だと思っていたものが、
かんきょうをわるくする原因だと知って、びっくりしました。
ゴミ拾いとかをして、海や山などを少しでもきれいにしたいなと思いました。
この本を読んでから、よく「SDGs」という言葉を聞くので、
ピンチということが、とてもよくわかりました。

はるか(小5)

『サステナブル・ビーチ』 を読んで

わたしがこの本で心にのこったのは、文の様子のあらわし方です。

主人公の七海がやることを変化をつけてあらわしてあります。

しかも、かんきょう問題についても、書いてあります。

物語とかんきょう問題の二つのことのお話です。

楽しくて読みやすかったです。

ふみか っ(小4)

『サステナブル・ビーチ』を読んで

ぼくも現実的なところから

海をきれいにする取り組みをしたいと思いました。

だいと(小5)

『サステナブル・ビーチ』を読んで

クジラは８０枚以上のプラスティックのふくろを食べて命を落とした。

だれかが「ポイッ」とするだけで、

悪いことをしていない生き物たちが命を落としていく。

まずは一人一人がごみをすてるという考えを

変えていったらいいと思う。海は人間だけのものじゃない。

ひまり(小６)

『さいごのゆうれい』　を読んで

少し長いので読みづらいとかんじるかもしれないですが、

登場人物の過去や物語の最後がとてもいいし、

ストーリー性があって、ずんずん読み進めます。

私はそこがオススメです。

こはる(小4)

『さいごのゆうれい』　を読んで

読み始めたときは、ゆうれいの国の話で、ただ不思議だなと思いました。

でも、とちゅうからは個性豊かな２人の人物がおもしろいなと思ったり、

かなしみを消してくれるトワイライトの話を読んで、

お母さんとの再会のシーンで感動しました。

私は悲しみも大事だと思うけど、本当にトワイライトがあったら

悲しいことを忘れられるから、少しほしいなとも思いました。

ネムがどうなったのかが気になります。

さき　ゅ(小６)

『さいごのゆうれい』　を読んで

わたしは「悲しみ」はいると思いました。

少しでも死んでしまった人を覚えていないと、

つらいことすらなくなってしまうからです。

ももか(小4)

『さいごのゆうれい』を読んで

わたしは、世界にかなしみがあったほうがいいと思った。

なぜなら、大事な物や人のことを忘れてしまうのがいやだから。

たとえかなしみで死にそうになっても、自分の記憶が

なにかに食べられたようにぽっかりとあながあくよりはいいと思う。

わたしは、大事な人を忘れないようにしたいと思った。

わたしは、ゆうれいは、本当にいると思う。

はるか(小5)

『さいごのゆうれい』を読んで

この本は、ハジメ（ぼく）とネムというゆうれいが“悲しみ”を取りもどす物語です。
人々はトワイライトという薬のせいで、死んでしまった大切な人をわすれてしまいます。
わたしの好きな場面は、ハジメたちがゆうれいの国へ行って、力をあわせてトワイライトを
消すところです。自分の大事な人をわすれたくないと強く思ったんだと思います。
最後に、ネムはハジメの小さいころの友だちで、川でおぼれて死んでしまったことが
分かります。わたしがもしハジメだったら、ネムのことを思い出したら
悲しくて悲しくてつらいと思います。 それでもハジメは
ネムを、大事な友だちを取りもどしたんだと思います。

こころ(小5)

『さいごのゆうれい』を読んで

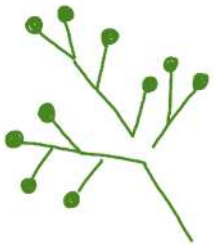
大切な人をうしなったときのかなしみと

向き合うことの大切さについて考えさせてくれる本でした。

その大切なひとのことをずっと心の中に残しておくためにも

悲しみは必要なことだと思います。

こうのすけ(小5)



『さいごのゆうれい』 を読んで

主人公のはじめが、なぞのゆうれい「ネム」のなやみを
いっしょに考えていて、はじめはこわがらずに向きあえるのが
すごいと思いました。

ゆきな(小5)

『さいごのゆうれい』を読んで

かなしみってなに？

私は「かなしみ」は必要だと思った。

忘れたい思いもあるけど、そんな日があったかどうかの

記憶がなくなってしまうのは、さびしい。

だから、私は、忘れられる薬ができても飲むことはしない。

ひまり(小6)

『イカル荘へようこそ』 を読んで

わたしが感動したところは、ホームステイの場面でママが

「ママは真子に捨てられたのね…」という言葉です。

この言葉は、「ごめんね」みたいな気持ちで言っている感じに思えたからです。

バードウォッチングの時、真子がサシバに付けた名前がとても面白かったです。

最後、パパがげき変したので、びっくりしました。

ももか(小4)

『イカル荘へようこそ』 を読んで

わたしは、この本を読んで、真子は本当に限界になったら
家を出ていって、すごいと思いました。わたしだったら、ずっと家にいて
へやにとじこもっていると思ったからです。
イカル荘についてから、鳥のことが好きになって、最初の時よりも
笑顔が増えてきている感じがしました。
わたしは真子にはイカル荘ですごした時間がとても大切だと思いました。
最終的には家族みんなが笑ってすごせるようになって、よかったと思いました。

はるか(小5)

『イカル荘へようこそ』を読んで

家からにげ出したい。帰りたくない。そんな気持ち、私にもある。

この本の主人公、真子と私は似ていると思う。

自分の意見を伝えられないところがあるからだ。

でも、真子はイカル荘のおかげで変わった。

この本で自分も変わらないと！と思うようになった！

ひまり(小6)

『はじめての夏とキセキのたまご』　を読んで

この本を読んで、私も化石はっくつをしてみたいと思いました。

今まで恐竜のことをあまり知らなかったからです。

私も世夏みたいに大物の化石を取りたいです。

そして、もっといろんな人に恐竜のことを知ってもらいたいです。

ともか(小5)

『はじめての夏とキセキのたまご』を読んで

本当にキセキのたまごだと思いました。

引っこしてきたばかりなのに、

友だちができていて、すごいと思いました。

最後がおもしろかったです。

ももか(小4)

『はじめての夏とキセキのたまご』 を読んで

わたしはこの本を読んで、最後まで何があってもあきらめてはいけないなと
思いました。理由は、まんまるな石みたいなものが化石で、
自由研究がすごくでかいものになったからです。
わたしは、すぐにできないと決めつけてしまい、もうそれから一生
やらなくなってしまいます。今まではこういうことになるのは
しかたがないと思っていたけれど、それはいけないことだと
気がつきました。おもしろかったです。

はるか(小5)

『はじめての夏とキセキのたまご』を読んで

この本はずっとドキドキしながら読みました。

いろんな登場人物と世夏がきょうりゅうの化石を見つけて、

とてもおもしろかったです。

新しいことにちょうせんすることが大切だと思いました。

あやか　っ(小5)

『はじめての夏とキセキのたまご』を読んで

結局何の恐竜だったのか気になります。

話の中の田舎とは、福井をイメージして

書いているのではないかと思いました。

意外と本当にあった話という可能性もなくはないと思いました。

だいと(小5)

『はじめての夏とキセキのたまご』を読んで

星原村に来たのがはじめはいやだった世夏も

仲間たちやきょうりゅうのことにであって、

どんどん星原村が好きになっていく所がみえました。

いろんな性格の登場人物がいて、物語をいろどっていました。

この作品でいろんなことが知れたので、よかったです。

こと(小6)

『縄文の狼』を読んで

おおかみなのに、人間にあまえたり守ったりしていて

すごいと思いました。

でも、オオアシが足をけがして

キセキとはなれてしまったのが、悲しかったです。

ももか(小4)

『縄文の狼』を読んで

主人公の心の奥底にある何か深い感情を

上手く読み取ることができなくて

感想を書くのが難しいです。

こうのすけ(小5)

『名物かき氷！復活大作戦』を読んで

私が一番おもしろいと感じたのは、
おばあちゃんがお店をしめて俊と話すところと、
俊がかき氷を食べようとしたら夢だったというところです。
なぜおもしろいかと言うと、一つ目のおばあちゃんのところは、
私の家にもおばあちゃんがいて、そのおばあちゃんに似ていたからです。
二つ目の俊の夢のところは、最後にマンボウのぬいぐるみと
目が合っていたというところがおもしろかったからです。
文章に書いていても笑えます(笑)

ゆみ(小5)

『名物かき氷！ 復活大作戦』を読んで

この本は、閉店してしまったある名物かき氷店のかき氷を食べる為に、
お祭りのときだけ氷屋を復活させようと頑張る少年少女のお話です。
「やればいつか絶対成功するぞ」
「失敗は、成功の元」
この本を読んで強く心に残ったのが、主人公の俊とヒビキのこの言葉です。
この言葉は、俊とヒビキが、お祭りの為に、苦しい時に言っていた言葉です。
俊とヒビキは、試行錯誤の末、念願のスペシャルかき氷を作り上げます。
ぼくも、めげずに頑張ろうと思いました。

よしまさ(小6)

『名物かき氷！復活大作戦』を読んで

最初、しゅんは、幼なじみのいっちゃんと「おうぎやスペシャル」を
食べるという目標で弟子入りしたけれど、色々な人の「おうぎやスペシャル」の
思い出などを聞くにつれて、いっちゃんだけでなく、色々な人にも
「おうぎやスペシャル」を食べてもらうという目標になったんじゃないかなと
思いました。ひびきは、とてもおばあちゃん思いだと思いました。
祭りの日の直前に色々とハプニングが起きたけれど、
それでも開店をさせたしゅん達はすごいなと思いました。

しおり(小5)

『名物かき氷！復活大作戦』　を読んで

俊の根性がとってもすごいと思いました。

最後の梅干しばあちゃんの言葉が

じーんとしました。

ももか(小4)

『名物かき氷！復活大作戦』を読んで

もし私が俊だったら、閉店ならしようがないと

あきらめてしまうのに、復活させようとするところがすごいと思った。

私も負けないように、「全力で」

いろいろなことに取り組みたい！

ひまり（小６）

『スウィートホーム』　を読んで

私は『スウィートホーム』を読んで、とてもおもしろい本だと思いました。

特に「美しい場所には美しい心が宿る」という言葉に共感しました。

家をきれいにしたら、お父さんがやさしくなった？のが、よかったなと思いました。

小林君の、宇宙がひっくり返るという話が、個人的にはおもしろかったです。

最後、千紗が夢の中で未来の自分とねこに会って、

起きたときにねこのひげが落ちていたのが不思議でした。

私も未来の自分と会ってみたいです。

さき　ゅ(小6)

『スウィートホーム　わたしのおうち』を読んで

わたしはこの本を読んで、わたしの家は千紗の家よりは
きたなくないけれど、ちらかっているので、
ちょっと心がきたないのかなと前半を読んで思いました。
だから、家を少しでもいいからきれいになればいいなと思いました。
その日からわたしは、少しずつ少しずつ家を片づけていっています。
でも、すぐにちらかってしまうので、ちらからないように工夫したいです。
おもしろかったです。

はるか(小5)

『スウィートホーム　わたしのおうち』を読んで

私はこの本を読んで、住む場所などは

きれいにそうじをすることが大切だと思いました。

なので、私も自分の部屋とリビングの引き出しのそうじをしたら、

心がすきっとしました。

登場人物がたくさん出てきたので、　とてもおもしろかったです。

あやか　っ(小5)

『スウィートホーム　わたしのおうち』　を読んで

『美しい場所には　美しい心が宿る』

それは、学校でも同じだと思う。

美しいクラスには美しい心が宿る

いいクラスだったら、

みんながいい心を持っているのかもしれないと思った。

私のクラスも、美しいクラスにしていきたい。

ひまり(小6)

『りぼんちゃん』 を読んで

親子関係、友達関係が分かるお話でした。

わたしも背が低くて、赤ずきんちゃんと同じだから、

オオカミと戦える6年生になりたい！

ももか(小4)

『りぼんちゃん』　を読んで

わたしは、オオカミが人の心のすき間に入って人を苦しめ、
きずつけるなんて思ってもいませんでした。
りおちゃんはりおちゃんなりの戦い方を、
あかりちゃんはあかりちゃんなりの戦い方を見つけました。
わたしは、まだオオカミとの戦い方を見つけていないので、
少しずつ自分の戦い方を見つけていきたいです。
そしていつかは、苦しんでいる人やきずついている人などの
心にいるオオカミを、自分なりの戦い方でたおして、
その人を幸せにしてあげたいです。

はるか(小5)

『りぼんちゃん』　を読んで

わたしが『りぼんちゃん』を読んで心にのこった事は、最後の場面です。

お父さんが大好きな理緒ちゃんですが、

お父さんをおこらせるとこわがってしまう理緒ちゃん。

児童相談所に行って家庭の事を話しました。

ある日、理緒ちゃんが帰って来たら、友達の朱里ちゃんが

とてもうれしそうでした。そこがとても感動しました。

わたしは、友達はいいなと思いました。

せん(小4)

『りぼんちゃん』を読んで

私は、はじめ表紙を見ただけだと、

明るいお話なのかなと思ったけれど、実際に読んでみたら、

とても悲しいお話だと思いました。

オオカミに立ちむかえる朱理がすごいと思いました。

あやか　っ(小5)

『りぼんちゃん』を読んで

「だれもが望んだ場所で幸せに生きるために、何ができるか」

この言葉を読んで、私はトラブルが起きても、その中で

幸せなことを見つけるのが大切なのだと分かった。

私はこれから、どんなことがあっても、

幸せなことを見つけるようにしたいと思った。

ひまり(小6)

『人魚の夏』 を読んで

わたしはこの本を読んで、約束したことを守らないと
後から自分がこうかいすることを知りました。
この本を読むまでは、約束をやぶっても、
べつにこうかいしないと思っていました。
これからは、なるべく約束をやぶらないようにしたいです。

はるか(小5)

『人魚の夏』 を読んで

夏が「人魚だから」という理由で

いろいろ満足にできないことがあるけれど、

めげずにいつでも明るくみんなと付き合っているのがすごいなと思いました。

夏は結局海に戻ってしまうけれど、また会えるといいなと思いました。

ななえ(小6)

『人魚の夏』　を読んで

女の子だから、男の子だから、そんな言葉、よく耳にする。

女・男なんて関係ない。

夏はそれを伝えたかったのではないかと思った。

学校でこの言葉が出てきても、夏や知里みたいに

乗りこえていきたいと思った。

ひまり(小6)

『ぼくの弱虫をなおすには』　を読んで

わたしはこの本を読んで、人のことを差別してはいけないなと思いました。

わたしは差別した思いはないけれど、相手にっては

差別されたように思われたことがあります。

だから、これからは差別しないように気をつけたいです。

また、無意識のうちに差別してしまったら、ちゃんと相手に

あやまらなくてはいけないなと思いました。

おもしろかったです。

はるか(小5)

『ぼくの弱虫をなおすには』を読んで

私とゲイブリエルは似ていると思った。

何でも悪いほうに考えてしまうからだ。

でも、ゲイブリエルにはいっしょに考えてくれる仲間がいて、いいと思う。

まだ時間はあるから、私もそんな仲間を探したいと思った。

ひまり(小6)

『青く塗りつぶせ』を読んで

カイトを助けようとする

ミナミ、セイ、タクミ、アカリ、ルカの気持ちは

大切な友情のあかし！

最後の終わり方がとても気持ちよかったです。

ももか(小4)

『青く塗りつぶせ』　を読んで

小学6年生なのに、同級生のカイトのために、海の生き物で
１００万円をかせぐというミナミがすごいと思いました。
テレビのえいきょうで、大変だったこともあったけれど、
無事成功したのでよかったと思います。

あやか　っ(小5)

『青く塗りつぶせ』を読んで

カイト家族の借金を返すために、島の物をネットで売って、
１００万円をためようという目標のために
セイ達がふんとうしていくところがとてもおもしろかったです。
他にも、テレビにセイ達のことが取り上げられて、
問題になってしまっても、島の漁師さん達が助けてくれたりと、
ペインテットブルーを始めたことで
島が一つになっていくのを感じました。

こと(小6)

『青く塗りつぶせ』を読んで

失敗などは何度でも塗りつぶせばいいのだ。

この言葉がすごく心に残った。

私は失敗すると、自分を責めてしまう。

この本は何度でもやり直せる、ということを教えてくれている気がした。

これからは失敗してもいいから、自分からトライしてみようと思った。

ひまり(小6)

『ぼくらのスクープ』　を読んで

学級新聞を作るとき、一度やめかけたけれど、

イダッチは事件の真そうをつきとめ、

他の子の意見についても答えを書いたところが、

心がおれなくてかっこいいと思いました。

ともか(小5)

『ぼくらのスクープ』を読んで

ぼくがこの本を読んで思ったことは、人によって

物事のとらえ方がちがうということです。

相手の気持ちを考えること、

それは本当なのかという事実の確認、

それを考えて行動するような人になりたいとぼくは思いました。

こうへい に(小5)

『ぼくらのスクープ』 を読んで

初めの方は、魔王とイダッチの意見が合わなかったから
どうなるかと思ったけれど、最後は2人の意見が合ったし
たくさんのスクープがあったのでよかったです。
私は2人がつくった新聞をもっと読みたいです。

あやか っ(小5)

『ぼくらのスクープ』を読んで

「世の中はこんなに複雑でわかりにくくて、最高におもしろい。」

この言葉を読んだとき、すごく共感した。

何か問題がおきても、必ず楽しいことがおきると思うのが大切だと思った。

この言葉を忘れずに、これから過ごしていこうと思う。

ひまり(小6)

『崖の下の魔法使い』 を読んで

大切な友達との思い出が、急にいらなくなってしまう時もあるんだと思った。
いやな思い出があった時は、モヤモヤした気持ちをなくしたくて
思い出をあずけたくなるけど、後からこうかいするかもしれないから、
私はそんなにあずけたくないと思った。

ともか(小5)

『崖の下の魔法使い』 を読んで

私のところにも魔法使いが住んでいたらいいのになと思いました。
お金ももらえるし、学校で失敗した思い出や
はずかしかった思い出がいっぱいあるからです。
大河が星南に告白したシーンは、友達といる時に告白するのは
ちょっと…と思いましたが、2回目の告白で OK してもらえたのが
すごくびっくりして、少しほっとしました。
最後の真緒からの手紙を見て、よかったなと思いました。

さき ゅ(小6)

『崖の下の魔法使い』 を読んで

私は「だれも取りに来ない思い出は、海の中でヒトデになり、
やがて消えていく」ということが印象に残りました。
もし私の思い出が海の中で消えてしまったら、とても悲しいです。
今はいらない思い出も、いつか大切になるかもしれないと
思わせてくれる１冊でした。

かほ(小５)

『崖の下の魔法使い』 を読んで

この本に出てくる「魔法使いさん」は何だか悲しい人だと思いました。
魔法使いの寿命はなく、限りなく生きられるから私はいいなと思ったけれど、
実際にそうなってみるとそれは本当にいいことなのかなと思いました。
また、「思い出を預ける」というのはとても便利だけれど、
大体その預けたい思い出はいやだったことだと思います。
でも、いやだったことほど自分で考えたりした方がいいから
私は魔法使いさんに思い出を預けるのはどうかなと思いました。

ななえ(小6)

『崖の下の魔法使い』を読んで

もし私の家の近くに魔法使いの家があったら、

悲しい思い出や、つらい思い出は、早く忘れたいと思ってしまう。

だけど、その思い出がいつかいい思い出に変わるなら、

そのままとっておきたい。

だから私は、思い出はとっておこうと思った。

ひまり(小6)

『そらのことばが降ってくる』 を読んで

私は歴史が大好きで、古文や短歌、俳句も大好きです。

この本は俳句の本なので、読んでいてとても楽しかったです。

俳句の用語や、より味わいのある俳句の作り方も学べました。

この本を読んで、ぜひ俳句を作ってみてください！

かほ(小5)

『そらのことばが降ってくる』を読んで

わたしはこの本を読んで、思っていることを
全部言うのは苦手だから、俳句はいいなと思いました。
この本を読む前は、俳句はおじいちゃんやおばあちゃんがやるものだと
思っていたから、この本を読んで、わかい人もやることを知って
びっくりしました。わたしも作ってみたくなりました。
とてもおもしろかったです。

はるか(小5)

『そらのことばが降ってくる』　を読んで

私はこの本を読み、あらためて俳句っていいなと感じた。

俳句だけで、仲間が増え、笑顔が増える。

すてきだと思う。

私も、いつもは伝えられない感情を俳句にのせて、

伝えてみようと思う。

ひまり(小6)

『天の台所』 を読んで

私はガミババが好きだ。

こわそうなガミババだったけれど、読んでいくうちに裏表が見えてきて、

すごい人なんだとわかったし、いい人だと思ったから。

料理コンクールで、ライバルのチームを助けた

天・光・陽の成長もまぶしかった。

ともか(小5)

『天の台所』を読んで

天が台所で料理を作るたびに、天だけではなく、
天の家族も少しずつ変わっていったなと思いました。
きっと、天の思い出の台所を守りたいという気持ちが、
ばあちゃんの死を乗り越えられずにいた
みんなを変えていったのだと思いました。
私は、がみババはとてもやさしい人だと思いました。
理由は、少し態度がきついけれど、
ちゃんと天達の事を思ってくれていたからです。

しおり(小5)

『天の台所』を読んで

わたしはこの本を読んで、なにごともやってみて
練習することが大事だなと思いました。
わたしは練習するのがきらいで、すぐにできないといじけてしまうけど、
この本を読んで、それはいけないことだと思いました。
これからは、少しずつ練習して、なんでもできるようになりたいです。
また、やめてしまっても、あらためてちょうせんすることも
大事だと思いました。おもしろかったです。

はるか(小5)

『天の台所』　を読んで

この本は、天と陽と光の三兄弟がみんなを笑顔にするために

料理を学んでいく物語です。

料理で人を笑顔にできるのはすごいと思いました。

天たちのおばあちゃんは病気で死んでしまいました。

天は思い出の台所の主になるために、がみババに料理を教わります。

わたしは、がみババと天の会話がまんざいみたいで好きです。

こころ(小5)

『天の台所』　を読んで

ぼくはこの本を読んで、料理はとても大切だということに気づきました。

その他にも、分別のことやそうじなどの家事がのっていて、

新たなことに、ちょう戦する気持ちになれるような本です。

こうへい　に(小5)

『天の台所』 を読んで

わたしが、心に残った事は3人で料理コンクールに出るところです。

3人が作ったおてんとう焼きは色々な味があり、みんなからも人気がありました。

3人は「お料理大好きでしょう」をもらいました。

わたしが3人で料理コンクールに出るところが好きなわけは、

3人で力を合わせて、すてきなおてんとう焼きができたからです。

わたしも3人のように料理が上手になりたいです。

せん(小4)

『天の台所』を読んで

あまり思い出したくない台所に立って、

天と陽と光がおてんとう焼きを作っているところが印象に残りました。

天たちが作った料理は、想像していて

おいしそうだったので、食べてみたいと思いました。

あやか　っ(小5)

『天の台所』 を読んで

だれかが声をかけて、だれかが助けて、バトンをつないでいく。

何か心にひっかかるものがあった。

私たちはバトンをつないで、つないでいるから、笑顔になるんだと思う。

私もたくさんの人にバトンをわたして、

たくさんの人を笑顔にしたい。

ひまり(小6)

『ソラモリさんとわたし』 を読んで

言葉って、いつも使っているものだけど、

意味まで意識することはなかなかない。

でも、ソラモリさんたちのように、一つ一つの言葉を考えてみようと思った。

私も美話たちのように、キャッチコピーを考えてみた。

― 想い(は)＝言葉。言葉＝想い。

小学6年生と21年生、ことばの旅 ―

ひまり(小6)